巻　頭　言

生かされている

三村　將　日本精神神経学会理事
Masaru Mimura

小春日和の穏やかな一日，国立新美術館で開催中の東山魁夷展を訪ねた．生誕110年の記念碑的イベントであるが，あるいは東京国立近代美術館で開かれた生誕100周年記念の時よりさらに内容は充実していたかもしれない．特に晩年の代表作である唐招提寺の障壁画のすべてが御影堂内部を忠実に再現して展示してあったのには心を打たれた．唐招提寺では昨年から御影堂の大修理が行われており，現在は拝観ができないからこそ実現可能であったのだろうが，素晴しい企画であった．

オーディオガイドやビデオを通じて東山魁夷の肉声を聞くことができたのもとてもよかった．東山魁夷は「風景の画家」と呼ばれているが,「風景とのめぐり逢いはいつの場合もただ一度のことと思わねばなりません．自然も私たちもともに生きていて，常に変化していくからです．無常という宿命の中に私たちすべてが生かされているのですから，今このひとときを同時に生きているという連帯感があるのではないでしょうか．その時の互いの心が通い合い，愛と美も生まれるのです」「人間も自然と根がつながって，この世の中に生かされているのです」と語っていた．あるいは著書「唐招提寺への道」の中でも「障壁画の仕事の進みが遅々として心細い気がしている時に，（略）「私は生かされている」という，平生の信条に立ち帰ると，私の心も落ち着きを取り戻し，（略）」と書いている（新潮選書，p.226）．

自分が「生かされている」と語っているのをほかにも聞いたことがある．京丹後市にお住まいで，2013年6月12日に男性では世界最高齢の116歳で亡くなった木村次郎右衛門さんである．次郎右衛門さんに限らず，百歳を越える百寿者（centenarian）は一様に，自分が何か超自然的な力に「生かされている」と感じるようである．通常，「老い」は心理的側面にも負の影響をもたらし，前期・後期の高齢期では身体機能や生活機能の低下とともに，主観的幸福感（subjective well-being）も低下する．しかし，百寿者においては身体機能や生活機能の低下があるにもかかわらず，幸せと感じる度合いが強まる．このような百寿者の多くが感じる多幸感は「老年的超越（gerotranscendence）」と呼ばれている．スウェーデンの社会学者であるTornstamが「物質主義的で合理的な世界観から，宇宙的，超越的，非合理的な世界観への変化」として提唱した概念である．いわば百寿者の方々はもはや人というより「神」の域に近づいている．逆説的ではあるが，「超」長生きしたいと思ったら，無理に生きようとせず，自然の摂理に任せたほうがいいのかもしれない．

「生かされている」という考えは，対極にある「自殺-自死」という精神医学上の大問題にも別な視点を与えてくれる．私は常日頃，学生の臨床実習に際して，自殺企図で救急外来に搬送されてきた人，あるいは回復困難な病気に苦しんで自ら死にたいと考えている人に対して，どのように「自殺してはいけない」と説得するのかを一人ひとりに問うている．学生たちは皆，真剣に考えて答を出すものの，通常は通り一遍の説明に終わってしまうことが多い．「人間以外の動物は自殺を考えることはない．ヒトも生物である以上，自ら命を絶つことは考えるべきではない，自殺は選択肢から外して考えよう」というのも1つの説明ではある．少なくとも，死を意識している患者，特に自殺を考えている患者に接する際，向き合う医療者は取りも直さず自分自身が「どのように生きているのか」を問われていることになる．自分が自然，あるいは世界の中で「何かに生かされている」のだと考えてみることは，自ら命を絶つことへの防波堤にはなりうるであろう．